

## グローバル化の時代に対処して

三浦 武雄

本会IFIP委員会委員長／元会長 (株)日立製作所顧問



最近の我々を取り巻く環境は大きく変化している。その1つが情報技術の革新に起因する社会的変革であろう。メディアのデジタル化と融合化、インターネットに代表されるネットワーキング、規制緩和、そしてボーダレス化等によりかつて経験したことのない創造的な新しい社会が生まれようとしている。しかもグローバルでその進化の速度は日進月歩でなく、秒進分歩といえる程の早さである。また、環境問題やセキュリティ問題に代表されるように、情報技術と社会とのかわりか、ますます重要になってくる。これに対処するためには研究開発といえども、従来の延長線上のままでは不十分なことは明白であろう。今こそ目標に対する確たるビジョン、これを実現するためのコンセプト、そしてスピードが重要であると考え。さらに加えて、グローバル化の時代こそ世界に対して具体的に貢献していくことが大切である。

まず第一に、今こそ来るべき未来でいかに貢献するかという明確なビジョン、コンセプトを持つことである。そして急変する市場の動きに振り回されることなく、先を見たアプローチが重要であり、これを基本に将来必要となるブレイクスルーの先行開始をしておくべきである。従来、我が国は研究開発、技術の革新に積極的な投資を行い、世界に卓越する技術で貢献し、今日の我が国の経済を大きく引っ張ってきた。一方、今日の急速に変化する社会の中で必要とするようなビジョン、コンセプトの面から見ると、いささか淋しい。今までは海外に手本があり、そのコンセプトに向かって、より高性能で、より信頼性が高く、使い勝手のよい製品を生み出すところに日本独自の製品価値を求めてきたように思う。しかし、これから展開するといわれている情報を基盤とする超情報化時代は、今まで経験したことのない新しくかつ多くの価値観が存在する社会であり、ビジョン、コンセプトなくしては積極的な世界に向かっての発信・貢献が期待できないことに

なるであろう。

次に重要なことは、グローバルアライアンスである。その最も重要な理由の1つは、世界標準化へのつながりである。オープンなビジネスでは事業規模は自ら増大するが、参加する企業収益は薄利であり、よほどの特徴を持たないかぎり、そのみでは大きな期待はできない。一方、独自技術をベースに生まれた事業は当初はそのもの持つ特徴で、ある程度の市場拡大は期待できるが、グローバル化には限界がある。これを取り除くには世界的な提携、戦略的なグローバルアライアンスが必要で、世界標準化への道となるものである。そのときに考えるべきことはGive and Takeの精神である。口にはするが忘れがちな他利共存である。そのためにもGiveできる技術、製品を常に持ち、相手にも十分メリットがあるように協力すべきである。それが協力の効果と永続性につながるものと考え。

グローバルな時代においては技術者は常に国際的立場で物事を考え自らの仕事に対し情熱と自信を持って、国際的にも信頼感をもたれるよう行動努力すべきである。現在、私はIFIPの日本代表、理事をしているが、その観点から考えても日本は技術面から見て必ずしも注目されていない現状である。その理由の1つは積極的な情報発信やキチンとしたプレゼンテーションをしていないこと、ビジブルな世界での貢献が少ないためと言われている。また、IPSJは現在米国のIEEE、ACMと、またアジア地域ではSEARCCやKISSと交流協力関係を持っているが、このようなグローバルかつ学際的な取り組みを一層強化する必要がある。新しい超情報化時代には光の部分とともに多くの影の部分がある。この問題の解決に対しても国際的に積極的に挑戦し、明るく夢のある社会の実現に新しいビジネスの創出に貢献したいものである。

(平成10年1月27日)